



(写真④は参加した選手たち)

## 「青天のへきれきです」

### 安定したゴルフで初優勝の久富和行

笑顔がはじけた。大会中の小郡カンツリー倶楽部の桜は、まだ3～4分咲き。これからという状態だったが、優勝した久富の表情も心も満開だった。「4年前にこの大会のことを知って、80歳になったら出よう、と思っていました。優勝は青天のへきれきです。自分でもびっくりしています」と照れた。1バーディー、5ボギーの76。ダブルボギー以上は1つもない。この安定ぶりが栄冠につながった。平均飛距離200ヤードのドライバーショットは「思った方向へ出て行ったし、ほとん



どフェアウエーを外していない」。さらに、パットも「良かった」となれば、大崩れは考えられなかった。

大会2日前の3月25日に練習ラウンドを行ったのだが、一緒に回ったのが2017年の今大会覇者・石橋国彦(福岡国際)。「この時、初めてこのコースを回ったのですが、石橋さんからいろいろとアドバイスをもらったのが良かった」と感謝する。

福岡県田主丸町(現久留米市)出身。浮羽工高卒業後、関東地方へ就職し、40歳で独立。ゴルフは仕事の関係で始めるようになり、50歳半ばに所属の小田原ゴルフ倶楽部(神奈川県)でシニアチャンピオンに輝いた。ベストスコアは同コースでの69である。

70歳前の病気を機に久留米市に帰ってきた。今は「ゴルフ一筋」。健康増進のため手引きカートで歩きながら筑後川河川敷を月6~7回ほどラウンドする。ゴルフの魅力を「人と会えるのが楽しい」と久富は穏やかに笑った。

## 1473回目のエージシュートならず

参加最年長、95歳の植杉乾蔵

○…これまでに1472回のエージシュートを達成している参加最年長、95歳の植杉乾蔵は前半54、後半57の111で記録更新はならなかった。「ドライバーもアイアンも飛ばん」と言いながらも、「この大会には死ぬまで出ますよ」と気力は十分だ。

このほど、これまでの記録などがまとめられたA4サイズの50冊の小冊子を国立国



会図書館に寄贈したという。「みんなと顔を合わせるだけでいいんです。数をいくつ打ってもいいから来て下さい」と参加した知人のプレーヤーから声を掛けられていた。

